



# サラナ



No.23 長寿寺報 令和2年10月

## お布施を受けるに値する者

皆さん、ごきげんよう。早いもので、もう十月となりました。私事ながら、ちょうど十年前の十月に私は修行道場を出て長寿寺に入寺しましたので、今年の十月は私にとって節目のひと月となります。わずか十年と思われるかもしれませんが、この間に154人の檀家さんが鬼籍に入られました。この多くの別れを経験したことで実年齢以上に歳を重ねた気がします。また、同時に多くの方々に支えられてきましたが、自分がそのようにして頂けるに相応しいかどうかはいつも自問自答しています。

さて、サラナ8月号でも触れましたが、仏教では世間の人々に対して、自分の持ち物を他の人に分けることを勧めます。これがお布施です。なぜ、そのようなことを勧めるかというと、人は空手にしてこの世を去るものであり、そんな私たちが身の回りのモノに対し、「自分のモノ」という強い思いを抱いていたら、それに応じて苦しみが増し、この世を去りがたく感じるからです。そうならないためにも、お布施を通して、少しでも自分のモノという観念を手放すことを仏教は勧めています。だから、お布施は他者だけでなく、自分のためにもなるので、古来より仏教ではお布施は修行であり、それに対して僧侶が礼を述べることは布施をした者の積んだ徳が半減させると言われます。ただ、一方でお布施を受ける側にもそれに相応しい振る舞いを求めます。

禅宗では、朝・昼と食事に際して食前と食後にいくつかのお経をお唱えしますが、その中に、「己が徳行の全闕を忖って供に応ず」という一文があります。これは、平素の自分の行いがはたして供養を受けるだけの資格があるかどうかを内省した上で供養に応じるという意味で、お布施を受ける僧侶はそれに値しなければならないということです。その意識の一端は仏教教団の規則である「律」にも見られます。数多く定められた律の中で、水中戯戒というものがあります。これは仏教教団のスポンサーであったコーサラ国のパセーナディ王が俗人のように水遊びをしている仏教僧侶を見かけて「自分はこんな者

たちにお布施しているのか。」とガッカリしてお釈迦様に苦言を呈されたことから「僧侶は水遊びをしてはならない」と定められたものです。この因縁からもお釈迦様がお布施される僧侶の在り方を強く意識していたことが伺えます。

日本仏教の場合は、飲酒妻帯と伝統的に仏教の戒律に沿わないものがあります。ご存知のように私も妻帯をしており、この点は慚愧の念に堪えません。もちろん、飲酒妻帯していても徳の高い僧侶は沢山おり、その方々はお布施されるに値すると思います。ただ、それにひきかえ私は浅学であり徳もありません。それでも少しでもお布施されるに値する僧侶でありたいという思いから三年前にお酒を断ち、不飲酒戒を守るようになりました。決して、それを誇るつもりはありませんが、お布施に値する僧侶となれるよう一層努めたいと思っています。

## ご案内

### 台風被害について

先般は台風9号・10号と続けざまに巨大台風が到来し、当寺でも本堂瓦の損壊や大応庵本殿の銅板の損壊、山門の柱が傾くなどの被害を受けました。



また、台風9号・10号による檀徒の皆さんの被害を把握したいので、母屋もしくは離れの建造物に一部損壊(瓦20枚以上損壊から)や半壊・全壊などの被害があった方は10月10日までにお寺にご連絡下さい。状況によっては本山より見舞金が支給されます。

# 釈迦の 生

～episode2～



## 前回のおさらい

今回は、シッタッタさん(お釈迦様)のお母さんが吉兆の予知夢を見て、シッタッタさんを出産したところをお話しました。

## 王子(シッタッタ)の受胎

通常の赤ん坊であれば、不浄物にまみれて生まれてきますが、シッタッタさんは一切の不浄物なく、宝石のように輝きながら生まれます。「オギャア、オギャア」と泣く事もなく、いきなり大地に立ち、周りを見渡して、自分と等しい者がいないの確認すると、北に七歩歩んで、「私は世界の第一人者である。私は世界の最年長者である。私は世界の最優者である。これは最後の生存である。いまや再び生存に入ることはない。」と獅子吼します。これが後々の仏伝で有名な「天上天下唯我独尊」の原点でしょう。シッタッタさんが生まれたとき、周りには梵天などバラモン教の神々が見守っていたと記述がありますが、インドでは天の上に住まうとされる梵天という神こそがこの世で一番偉いと考えられており、その梵天を頂点に形成される教えがバラモン教です。そして、このバラモン教の教えがインドの人々の価値観を形成していました。以前にお話したカーストもその一つです。その中で、「私が世界の第一人者」と言ったわけですから、バラモン教よりも、梵天よりも、自分(仏教)の方が上だと示した格好になります。また、「これが最後の生存」とは、インドにおいて、生き物は生まれ変わり死に変わりを繰り返すと考えられていますが、生の根本は苦だと考えられています。だから、その生まれ変わり死に変わりを止めて、二度と生まれ変わらないことこそが目標となり、これを涅槃といいます。シッタッタさんは前世において兜率天に住まう神であったとされますが、過去世の長きに渡る修行の末に、今生において涅槃に入ることが確定していたということです。バラモン教においては、梵天を頂点とした無数の「神々」がこの世界を差配していると考えていましたが、仏教において

神はもはや、そのような力はなく、寿命こそ長いものの人間と同じように、やがては死を迎える存在として捉えられています。いずれにせよ、生まれたばかりの赤子がいきなり立って、歩いて、お喋りまでするという驚愕の展開ですが、これはシッタッタさんの前世である兜率天に住まう神様という前世のエネルギーが微存しており、それが立って歩かせてお喋りをさせた所で切れて、ただの赤子に戻ったとされています。よく仏教を日本人の常識に当てはめて見る人が居ますが、それではなかなか理解できません。仏教はインドで生まれた宗教であり、仏教誕生の背景にあるものが当時のインドの習俗や世界観であることを踏まえると、また新たな世界が見えてきます。

## アシタの涙

やがて、悟った人ブツダとなるシッタッタさんの誕生に神々は歓喜します。その様子をスッドーダナ王のもとを出入りしていた苦行者アシタが見て、神々に理由を尋ねると、「スッドーダナ王の息子であるシッタッタ王子はやがてブツダとなるお方であり、無上の教えを説かれる。我々はいずれ、それを聴くことができるので喜んでいるのだ。」と答えました。それを聞いたアシタは急いでスッドーダナ王の王宮に出向き、生まれて間もないシッタッタさんに謁見することを申し込みます。その願いを聞き入れたスッドーダナ王はシッタッタさんを連れてきて苦行者アシタに対して敬礼させようとし、インドでは修行者を敬う習慣があったということです。しかし、できませんでした。なぜなら、世界の最優者であるシッタッタさんにとって生涯を通じて敬礼するに相応しい者はおらず、無知な者がシッタッタさんの頭を苦行者の足元にあてがえば、その苦行者の頭は七つに割れてしまうからだそうです。梵天ですらひれ伏すことを考えれば当然のことかと思いますが、インドでは頭が七つに割れるなどの表現が本当に多いです。アシタはシッタッタさんの尊顔に拝し、シッタッタさんがブツダとなることを確信して微笑しますが、高齢の自らはブツダの教えを聞く前に寿命が尽きてしまうことを自覚して涙をこぼします。そして、自らの代わりに甥のナーラカに出家をさせ、ブツダの教えを聞くことを託し、三十五年後、ブツダとなったシッタッタさんにナーラカは教えを説いてもらい、涅槃に入ることになります。続きはまた来月に。